

黒田 泰三（芸術学）

狩野光信の時代

本研究は、狩野永徳亡き後、狩野派の統領となった狩野光信の画業に焦点をあて、桃山時代から江戸時代という日本美術史上の一大転換期の絵画史を、より有機的かつ立体的に再構築しようとする意欲的な労作である。

従来、この時期の絵画史は、光信の父である狩野永徳による豪壮な様式から、光信の甥にあたる狩野探幽の淡雅な様式への変遷として把握され、そこに政治の中心が京都から江戸へと移り、戦国の激動から幕藩体制の安定へと変化する時代相が反映すると解釈されてきた。一方、光信については、江戸時代の画評における否定的な見解や現存作例が少ないことが理由で、十分な検討が行われてきたとはいえ、永徳と探幽をつなぐ狩野派の統領であり、移り変わる時代の当事者であった光信の画業は、なごらくその解明が待望されてきた課題でもあった。

本研究では、近年の光信再評価の研究動向を踏まえつつ、まず光信の美的特質が、叙情性にあることを代表作の園城寺勧学院客殿襖絵や宗像大社本三十六歌仙絵の分析において確認し、その淵源が父の永徳よりは、むしろ時代の寵児として台頭してきた長谷川等伯に求められることを指摘する。とくに光信と長谷川派との交渉は、京都の悪所を舞台とする遊楽図の制作において、さらに積極的に関連づけられ、光信の傘下にあった年下の叔父にあたる狩野長信が深く介在していることを、画風と図像の丹念な比較をとおして実証的に明らかにしている。狩野派統領の光信やその傘下にある長信と長谷川派の交渉という大胆ともいえる本研究の新見解は、個々の作品の丹念な比較検討と永徳亡き後の京都画壇の状況から必然的に導きだされた観点として説得力があり、狩野派の内部の比較検討と理論的發展に閉じられてきた従来の研究に対して、大きな修正を迫るものとして評価できる。また、次代の探幽周辺で光信の画業が否定された原因について、はじめに納得しうる解釈を提示したことも大きい。

光信没後、幕藩体制の確立とともに探幽の淡雅な様式がアカデミズムを形成していく過程で、光信が方向づけ探幽が否定することになった風俗画への展開は、長信によって継承され、「花下遊楽図屏風」（東京国立博物館）に結実したとする解釈は、上述の観点の首尾一貫した論理的展開のなかにあり、作者不詳とされてきた狩野派風俗図の代表作としてしられる「相応寺屏風」（徳川美術館）や「彦根屏風」（彦根城博物館）が、晩年の長信の制作であるとする新知見も十分な説得力をもっている。

総じて、本研究は、周到な作品分析をとおして、狩野光信の画業の再評価を行い、光信芸術の波及と継承から長信という新たな個性を実証的に導き出し、その結果、光信から長信へと至る一筋の優れた画業の発展を、これまで見失われてきた確かな時代として新たに位置づけることに成功しており、桃山時代から江戸時代の美術史研究に大きな一石を投じている。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認めるものである。